

京都大学たちばな賞（優秀女性研究者賞）表彰式

若手の女性研究者の優れた成果を讃える制度である京都大学たちばな賞（優秀女性研究者賞）の第8回表彰式が、3月3日（木）京都大学にて開催されました。

はじめに、選考委員長の稲葉 カヨ理事・副学長より開会の挨拶がありました。

次に、たちばな賞 学生部門受賞者の田辺 弘子氏（人間・環境学研究科 博士課程3年）、研究者部門受賞者の井上 恵美子氏（経済学研究科 講師）に、それぞれ山極 壽一総長より表彰状と記念楯が授与され、株式会社ワコールの安原 弘展代表取締役社長より副賞の「ワコール賞」が授与されました。

続いて、優秀女性研究者奨励賞 学生部門受賞者の信川 久実子氏（理学研究科 博士課程3年）に、山極総長より表彰状が、安原社長より副賞が授与されました。

次に、山極総長、安原社長から受賞者へ祝辞が述べられました。

その後、山極総長、安原社長、川添 信介理事・副学



左上より、川添理事、稲葉理事、山極総長、安原社長
左下より、田辺氏、井上氏、信川氏

長より、受賞者へ研究テーマに関する質問があり、田辺氏、井上氏、信川氏がそれぞれ回答しました。

最後に、川添理事・副学長より閉会の挨拶があり、表彰式は盛会のうちに終了しました。



たちばな賞（優秀女性研究者賞）

部門	氏 名	所 属 ・ 身 分	研 究 テ ー マ
学 生 部 門	田辺 弘子	人間・環境学研究科 博士課程3年	ヒトの立位制御メカニズムの包括的解明： 人間の文化的身体運動と自然・社会環境の関連性
研究者 部 門	井上 恵美子	経済学研究科 講師	気候変動の影響下における企業行動

優秀女性研究者奨励賞

部門	氏 名	所 属 ・ 身 分	研 究 テ ー マ
学 生 部 門	信川 久実子	理学研究科 博士課程3年	銀河面 X 線放射の観測的研究：宇宙線の寄与の発見

冊子「未来に繋がる青いリボンのエトセトラ Vol.3」発行

さまざまな学問分野で活躍する本学の女性研究者を紹介する冊子「未来に繋がる青いリボンのエトセトラ」のVol.3を発行しました。なぜ研究者の道を選択したのか、研究の面白み、難しさ、研究する上で大切にしていることなど、それぞれの研究者の思いや経験が詰まっています。

男女共同参画推進センターにて冊子を配布しておりますので、必要な方はセンターまでご連絡ください。また、ホームページからPDF版をダウンロードできます。



出前講義

滋賀医科大学

2月12日（金）、滋賀医科大学にて男女共同参画推進のための講演会が開催され、稲葉 カヨ理事・副学長が「男女共同参画の現状と課題～女性研究者支援を通じて～」をテーマに講演を行いました。



京都府立洛北高等学校

3月11日（金）、京都府立洛北高等学校にて、稲葉 カヨ理事・副学長が「“免疫” 味方？ それとも 敵？」と題し、講義を行いました。



平成 28 年度保育園入園待機乳児保育室 開室

学生、研究者の学業、研究と育児の両立を支援することを目的とし、「保育園入園待機乳児のための保育施設」を設けています。この保育施設は、現在、保育園の入園待ちを余儀なくされている研究者等を対象とします。詳細はセンターのホームページをご覧ください。



保育室の概要

開室期間	平成 28 年 4 月 4 日～平成 29 年 3 月 31 日
開室日時	月曜日～金曜日午前 9 時～午後 6 時 (時間外保育は、午前 8 時～9 時／午後 6 時～8 時)
保育場所	京都大学男女共同参画推進センター
利用資格	京都大学に所属する学生、研究等に携わる教職員（日本学術振興会特別研究員を含む）
対象乳児	生後 9 週目～15 ヶ月未満の健康な乳児
定 員	4 月～5 月：3 名、6 月～8 月：6 名、9 月～翌 3 月：18 名

平成 27 年度 ワーキンググループ活動報告

広報・相談・社会連携事業 WG

主査 山末 英嗣（エネルギー科学研究科）

広報事業では Women and Wish フォーラム 2「男女共同参画推進センターの実験研究補助者制度を利用して」を行った。前回と同じく総長との意見交流を主体とし、京都大学の Window 構想における本センターの重要性を再確認した。

社会連携事業としては、第 10 回女子中高生のための関西科学塾、女子高生・車座フォーラム 2015 を学内に開催し、次世代育成のための活動を行った。これからの社会を担う若い女子学生に対し、研究職に興味を持たせるような機会を提供するとともに、更なる工夫、改善の必要性を感じた。

そして、センターの活動について、ウェブサイトやニュースレターを通して、学内外に広報活動を行った。

就労支援事業 WG

主査 佐藤 亨（情報学研究科）

本 WG の主要活動である「研究・実験補助者雇用制度」については、育児や介護期にある研究者の研究継続支援という目的に即して、アンケートなどに示される利用者の声も考慮しながら、毎年、少しずつ改良を加えてきている。本年度中の実績は、第 1 期で応募者 19 名、利用者 16 名、第 2 期で応募者 26 名、利用者 16 名と、時期により変動はあるもののここ数年増加傾向にある。

予算の制約のなかで、応募者が困難な状況にあることがわかりながら十分な支援ができないケースも増えてきている。また、ここ数回の傾向として、特任教員・研究員など比較的短い任期で京都大学に所属している研究者、特に外国人研究者からの応募が増加している。不安定な雇用、慣れない土地、家族からの援助も望めない、という状況のなかで育児や介護と研究の両立に苦慮されている男女研究者も多い。

雇用形態の変化や教員のダイバーシティ拡大に適応した制度とその運用の見直しも、制度全体の拡充とともに今後の課題である。



育児・介護支援事業 WG

主査 小西 由紀子（理学研究科）

当ワーキンググループは京都大学構成員の育児と介護に関する支援活動を行っている。今年度は待機乳児保育室を 2015 年 4 月 6 日に開室した。ここでは認可保育所に入所できなかった乳児をお預かりしているが、利用希望者は少なくなく、3 月の利用者は定員 18 名を超える見込みである。11 月 25 日には保護者懇談会を開き、保育士や保護者の間の交流をはかった。昨年度からの変更点として、女性研究者だけでなく男性研究者も利用可能になったことが挙げられる。また、これまで 9 月だった開室を 4 月とした。男性利用者は 5 名、4 月から 8 月の利用者は 6 名だった。

病児保育事業 WG

主査 足立 壮一（医学研究科）

京都大学男女共同参画推進センター・病児保育室「こもも」（以下、病児保育室）は、京都大学に在籍する全ての教職員・学生の子供（生後 6 ヶ月から小学校 3 年生）を対象とし、急な疾病により保育園・幼稚園、小学校などに通うことの出来ない病中病後児の保育を行っている。事前登録制による運用で、登録者数はのべ 811 名、うち平成 27 年度の新規登録者は 79 名と年々増加している（平成 27 年 12 月末現在）。定員 5 名（感染隔離室 1 名を含む）であり、平成 27 年度は 405 名の利用があった（平成 27 年 12 月末現在）。利用状況は感染症の流行に大きく左右されており、定員を上回る利用希望のために断わらざるを得ない日もしばしばみられるが、利用者の感想としては概ね良好である。また、京大病院オープンホスピタルやホームページ等を通じての広報活動も継続して行った。

保護者からの保育許可基準の引き下げを求める要望を受けて、京都大学医学部附属病院感染制御部の承諾を得て平成 27 年 6 月より利用基準を変更したところ、利用率は増加傾向にある。また、予約時間や事前登録方法の見直しも行った結果、より利用しやすくなったという声をいただいている。感染対策上、困難な点もあるが、育児を行いつつ、仕事や学業を継続することの可能な環境を実現するため、今後も引き続きよりよい運営方法を検討する必要がある。

連載：研究者になる！－第56回－

研究者になる ～ロールパン？～

理学研究科・教授 高橋 淑子

私は1988年に理学博士の学位（京都大学）を取得して、すぐに日本を飛び出した。フランスに3年間、アメリカ3年間と渡り歩き、6年ぶりに日本に帰国した。日本を出る前は、「同じ能力だったら男を採用するぞ」と面と向かって言われるような社会だった。“こんな男社会なんかまっぴらごめんだ、もう日本なんかに戻るものか！”と日本を後にした。事実、フランスにいた3年間は、一度も帰国していない（その一番の理由は貧乏だったからである）。

ところが、帰国後6年ぶりにみる日本は、まるで手のひらを返したように変わっていた（少なくとも表面上は）。「女を採用しまーす！女、女、女を発掘しよう！」という、以前では信じられないようなかけ声があちこちから聞こえてきた。なにか気色悪いと思ったが、その理由は後にわかることになる。そのころから、「ロールモデル」という言葉を耳にするようになった。しかし当時の私はこういう言葉をきいたことがなかったので、「なんだ、このへんてこなカタカナは？ きっと『ロールパン』を焼くときに使う鋳型みたいなものだろう」と思っていた（他にもやたらとカタカナ言葉が増えてきたのもその頃である）。

私の専門分野は発生生物学である。1つの受精卵から、どのような仕組みで脳や心臓、そして手足が出来上がるのかを理解する学問である。発生生物学は統合生物学であり、DNAや遺伝子のレベルから細胞や臓器の働きまでを視野に入れて、形作りの謎を解き明かす。有名なiPS細胞も発生生物学を基礎にして花が咲いた成功例の1つである。発生中の胚（人間でいえば胎児）の中でせつせと“仕事”をしている細胞をみていると、わくわくドキドキの連続である。

私は高校の時の先生のおかげで、生物学が大好きになった。当時実家から5分のところにあった広島大学理学部生物学科に入ったが、どうも期待とちがった。体育会のワンダーフォーゲル部だったので、授業はサボり倒して山ばかりいっていた。そうこうするうちに、当時の京都大学教授の岡田節人先生が書かれた「試験管の中の生命」や「細胞の社会」を読んで、すっかり動物発生の魅力にとりつかれ、岡田研究室の門をたたいた。

生まれて初めての下宿生活。私は究極の自由を獲得した。岡田研のドアを開けると、そこから一気に世界につ

ながる感覚を覚えた。大学院ではES細胞（iPS細胞のもとになった細胞）を使った細胞分化の研究を進め、5年間が楽しく過ぎていった。しかし当時は、男でも就職は困難を極める時代である。ましてや女だと絶望的だった。そう

いうとき、フランスのニコル・ルドワラン先生が第2回京都賞受賞のために京都に来られた。岡田節人先生の友人であったこともあり、私は彼女と話をする機会を得た。そのとき彼女から「私のところにポストクに来ませんか？」と尋ねられた。大感激して「はい、是非行きたいです」と答えるのに5秒もかからなかった。今のうちにWebもemailも無い時代である。しかし、人生の選択をえいっ！と決めて、あとは腹をくくって死にもの狂いで走り抜くという道も悪くない。

大学院時代、女は私1人という状況であったのに対し、ルドワラン先生の研究所では7割ぐらいが女性だった。加えて“ラテン文化の洗礼”も浴びて、まるで違う惑星に来たような気分だった。3年間の滞在のうち、前半では遺伝子のクローニングが難航してミゼラブルな毎日を送ったが、後半ではロケット噴射のごとく一気に研究を進めた。前半期データに苦しんでいた時には私を罵倒し続けていたルドワラン先生も、後半期では私を認めてくれたのか、夢一杯のディスカッションをしてくれた。そして私は、生物学の「本当のすばらしさ」を学ぶことが出来た。

冒頭に書いた“気色悪さ”とはなんだったのか。うわべだけのかけ声の裏に潜む「暗い影」を感じたように思う。その影は、その後の社会に新たなゆがみを生み、さらに悪いことに、それに批判的な言論も抑圧されつつある。その成れの果てがああのSTAP細胞事件だとすると、私が感じていた気色悪さとは、20年後のゆがんだ社会の予言であったのかもしれない。といっても800年以上も続いた日本の男社会を瞬時に変える特効薬などあるはずもない。大切なことは、社会のゆがみを受け入れながらも、それに対する批判的精神を堅持することであろう。少なくとも、私にとって「母」のような存在であるルドワラン先生を、ロールモデルなどというカタカナで表したくはない。彼女は私にとって、永遠の「あこがれ」なのである。



Gender Equality Promotion Center

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>